実りのある「教員免許更新制」

専修大学教育学会で卒業生らがパネルディスカッション

教育職についている卒業生でつくる専修大学教育学会（会長＝日高義博理事長・学長）の第56回大会が11月23日、神田キャンパスで開かれ、約100人が参加した。

研究会では教員として必要な資質能力が保持されるよう定期的に最新の知識技能の習得を図るために2009年度からスタートする教員免許更新制をテーマにしたパネルディスカッション「実りのある免許更新制とは」が行われた。09年4月に開校する都立大田桜台高校長に内定している長船孝明氏（昭53商）がコーディネーターを務め、江東区立東陽小学校長の神山安弘氏（昭49文）、八王子市立第五中学校長の齋藤博志氏（昭54文）、都立武蔵高校副校長の錦織政晴氏（昭55院文修）、広瀬裕子法学部教授（教職課程協議会委員長）、矢野建一文学部長、松木健一専修大学常務理事がそれぞれの立場から意見を述べた。その後、熊野剛雄名誉教授が「世界経済の現段階を考える」をテーマに講演を行った。

熊野剛雄名誉教授

先輩から勉学環境の良さに驚きの声

商学部奥村紀夫教授ゼミOB・OG会を生田キャンパスで

鳳紀会（商学部・奥村紀夫ゼミ）は11月15日、ゼミ創立30周年記念祝賀会を生田キャンパスで開催＝写真。思い出話に花を咲かせた。

第1期生から32期生（学部2年次生）まで43人が参加したほかサプライズゲストとして奥村教授の奥様・幸子さんをお招きした。

「なにかとご迷惑をおかけしたおわびのしるしに」と卒業生から幸子夫人に花束が贈られ、学生からは奥村教授に記念品が贈呈された。懇談では先輩・同期・後輩問わず輪が広がり、笑顔あふれる楽しいひとときを過ごした。

粟飯原稔・鳳紀会会長（昭59商）は「OB・OG会を大学で開催するのは初めて。我々の時代との勉学環境の差に驚き、うらやましく思った。現役学生との交流も深まり、とても有意義。今後はOB・OGがもっと参加できるよう企画したい」と語った。

最後に校歌を斉唱、奥村教授にエールを送り、鳳紀会の永遠の結束を誓い合った。

（鳳紀会幹事・張夏玉＝大学院商学研究科博士後期課程）

専修大学経済学部　社会人聴講生募集

【聴講期間】4～7月、9月～平成22年1月
【聴講場所】生田キャンパス（昼間）
【出願期間】2月3日(火)～16日(月)
【選考日・方法】3月7日(土)書類審査および面接
問 教務課経済学部 ☎044-911-1257

校友短信

桂小文治さんが芸術祭・優秀賞を受賞

落語家の桂小文治さん（本名＝古田繁昌・昭55商）が文化庁所管の平成20年度芸術祭・大衆芸能部門で優秀賞を受賞した。受賞対象＝「宮戸川(上)(下)」（10月29日、お江戸日本橋亭「桂小文治十八番創りの会」での公演）。

女性史学賞を受賞

押山美知子さん（平18院文博）

押山美知子さん（平18院文博）の『少女マンガジェンダー表象論 ―〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』が、女性史学に関する優れた著書に贈られる第3回女性史学賞を受賞した＝写真。

押山さんは少女マンガ研究の新鋭。博士論文を基にした同書では、『リボンの騎士』『ベルサイユのばら』など少女マンガに登場する男装キャラクターを、その姿や行動とともに綿密に分析、少女マンガのジェンダー表象の変遷について論じている。

現在は本学の人文科学研究所特別研究員として、少女マンガ、現代文学に関する研究活動を継続中。

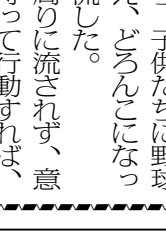
『少女マンガジェンダー表象論 ―〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』（彩流社・本体2200円＋税）

平成21年度年会費納入のお願い

平成21年度の校友会費払い込み用紙を配布しています。未納の方は事務局までご連絡ください。年会費は3000円で4月から翌年3月までの1年分となり、支部活動や会員の福利、在学生の活動支援などに活用されます。校友会活動の充実のため、年会費の納入にご協力をお願いします。なお、「専修大学カード」会員の方は、ご指定の口座より引き落としとなります。

※年会費納入者には「ニュース専修」が送付されます。

「アドニス46号」刊行



校友会情報誌「アドニス46号」が1月15日に発行されました。今号は、「新春座談会」＝甘竹秀雄会長＆会長夫人／西島篤師愛知県支部長＆支部長夫人。特集「専修大学の個性」、第4回・生田が変わる「われら専修人」秋山真咲、明石康弘。「ホームカミングデー」「ワイン大学」「プチ講演会」報告。

校友会へのお問い合わせは校友会事務局☎03（3265）7579まで。

校友の本紹介

ある校長の話　教育への補助線

新崎　和治（昭44経済）

38年間教鞭をとり、沖縄県与那国小、石垣第二中、川平小中で校長を務め、2007年3月に定年退職した著者が、職員朝会（会議）や全校集会で話してきたことをまとめたもの。

「教えることは共に希望を語ること」という著者は、この本が「教育」という作業の一助になってほしいとタイトルをつけた。生徒たちに勇気をもたせる愛情あふれる言葉や、教諭たちの成長をうながす厳しい言葉など、「人づくり」の実践者として教育に尽くしてきた著者のリーダーシップがうかがえる話が約200本掲載され、学校だけでなく、企業や家庭など、さまざまな場面で活用できる心に響く内容である。

（南山舎・税込1000円）

専大校友を訪ねて

日本国際協力センター
国際研修部東京業務室副室長
加藤　宏紀さん（平8文）

日本国際協力センター（JICE）は、開発途上国から「日本」に研修に訪れる人々へのサポートを担い、通訳や資材など諸々の手配を行う。日本の政府開発援助の〝顔〟国際協力機構（JICA）のいわば〝後方支援〟機関。

「国際協力と聞くと現場は海外と思われがちですが、日本国内でのサポートも大切な仕事」と強調。さらに「仕事の醍醐味は人と人とをつなぐ楽しさ」と語る。

「外から日本を見たい」と文学部国文学科に学んだ学生時代は、夏や春の長期の休暇のたびにアジア諸国をバックパッカーした。訪れた国や地域はタイ、インド、ネパール、アラスカ……。行く先々で、もののとらえ方の違いを体感、その経験が後の仕事の土台となった。

―学生時代の「世界」体験が土台に―

卒業後は、ニュージーランドのオークランドでの「ワーキングホリデー」を経て、青年海外協力隊員として99年から2年間、ハンガリーのブダペストで日本語を教えた。

東西を遮断していた「ベルリンの壁」が崩壊された後の過渡期にあたり、民主化に夢を託すハンガリーの人々は、日本人に親しみをこめて声をかける。それまで気がつかなかった日本文化の豊かさや日本人の勤勉さを改めて認識した。同時に、固定観念にとらわれずに人と接し、行動する欧州の人々と日本人との違いを実感した。

「国際協力は人と人とを結び付ける。この道で生きていこう」。モラトリアム人間だった学生時代から探し求めた自分の行く道が見えた。

愛知県小牧市出身。01年、JICEに入り、05年から3年間滞在したタンザニアでは、業務のかたわら、子供たちに野球を教え、どろんこになって交流した。

「周りに流されず、意志を持って行動すれば、〝道〟が見えてくる」

まっすぐ前を見据え、後輩へのメッセージを贈った。

ラオス日本人材開発センター女性スタッフ本学訪問

国際経済学科生と交流

▲　国際経済学科生の案内で生田キャンパスを見学するＬＪＣのカンプイさん（右端）

ラオス日本人材開発センター（ＬＪＣ）の現地女性職員が11月18日に生田キャンパスを視察、学生と交流した。

ＬＪＣは国際協力機構（ＪＩＣＡ）がラオス国立大学の協力を得て、日本のビジネス・語学・文化についての技術発信を担う、ラオスの首都・ビエンチャンにある研修所。来学したのはＬＪＣの相互理解促進室で文化交流事業を担当するカンプイ・ヴィラスックさん。ＬＪＣプロジェクト日本研修の一環で来日した。

経済学部国際経済学科の授業「海外特別研修」（ラオス、タイ訪問＝担当・飯沼健子准教授）では、受講学生がＬＪＣを毎年訪れている。昨夏には、「海外特別研修」を受講した古谷麻里香さん（4年次生）が、ＬＪＣ初の学生インターンシップ生となった。これら交流の実績で、本学が日本研修の訪問先に選ばれた。

カンプイさんは大林守・国際交流センター長から本学の留学制度や国際交流活動について説明を聴き、学生の案内で図書館、学生食堂などキャンパスを見学。飯沼准教授、学生13人と懇談した。

「学生の皆さんの温かいもてなしに感激した」

「図書館は素晴らしい充実ぶり。本の配置など参考にしたい」と本学での印象を語り、「ラオスには鉄道がなく、バスが主な交通手段。日本の複雑に整備された鉄道交通網に驚いた。それらを乗りこなす日本人はなんと記憶力が良いのか」と話すと会場は笑いに包まれた。

今春、古谷さんに続きＬＪＣの学生インターンシップ生に予定されている小林夏季さん（3年次生）は「海外特別研修」で、親切で穏やかなラオスの人々が大好きになり、カンプイさんとの交流でラオスをもっと知りたいと思うようになりました」と話す。